

攝氏百二十度以上ニ加熱セル「ビタミンノB運命

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31295

種々ナル利尿劑ト自ラ異リテ此レヲ注射スルモ過糖血症ヲ呈セザルノミナラズ反ツテ正常血糖量ヲ低減セシム。而モ此ノ作用ハ一般ニ信ゼラレシ尿素攝取ノ水血症トモ自ラ異ナリ同時ニ行ヘル血液食鹽量ニハ大ナル變化ナク且血液水分及血球數並ニ血色素量モ何レモ著明ナル水血症ノ存在スルコトヲ示サズ。而モ正常血糖量低減トハヨシ水血症存スルトスルモンノ間時間的差別並ニ強弱ノ度甚シクシテ單ニ一水血症ノミヲ以テハ此ノ現象ヲ説明シ盡シ難シ。更ニ著者ハ尿分泌量並ニソノ成分ノ變化アリヤヲ檢シ他方ニ種々ナル實驗的過血糖ヲ抑制シ得ラル、ヤヲ攻究セリ。後進ンデ尿素ノ組織化學的證明ヲ行ヒテ尿素ノ生理的新陳代謝並ニ利尿機轉、正常血糖低減現象ニ對シ鮮明スル所アラザルヤトテレシカ氏法並ニ「キサントヒドロール反應法ヲ用ヒテ研究シ得タルトコロヲ述ベタリ。

鹽酸エメチン」ノ腸運動ニ及ボス作用

金澤醫科大學第一內科教室(主任山田教授)

武 部 伴 吉

演者ハ鹽酸エメチン」ノ腸運動ニ及ボス作用ヲ研究セントシ、山田、柿沼兩氏ノ考按ニナル腸運動検査法ヲ應用シ家兔ノ生理的狀態ニ於ケル腸運動ノ狀態ヲ「キモグラフィオン」上ニ描畫セシメ鹽酸エメチン」ノ靜脈内注入ヲ行ヒ、其ノ腸運動ニ及ボス影響ヲ觀察セリ、而シテ鹽酸エメチン」ノ少量ニテハ主トシテ腸管ノ收縮振幅ノ増大ヲ認め、且ツ緊張ノ上昇及收縮數ノ増加ヲ認め大量ニテハ緊張ノ下降、收縮振幅ノ減少等抑制作用ヲ示スモ注入後數分乃至十數分後ニ於テ呼吸停止ノ下ニ斃ル、ヲ見、而シテ其ノ作用點ヲ末梢性ノモノト思惟スト結論セリ。

攝氏百二十度以上ニ加熱セル「ヴァイタミン」ノB運命

守 成 一

「ヴァイタミン」B含有製劑ノ副交換神經系亢奮性ノ原因ニ就キ「ベルン大學藥物學教室ニ於テ教授ビユルギー氏ト助

手ドルベルグ及ウルマン兩氏トハ其ノ見解ヲ異ニセリ、前者ハ他ノ含有物ニ歸シ後者ハ「ヴァイタミン」自己ノ作用トナセリ、此ノ決定ヲ遂ゲンガ爲メ余ハ次ノ小實驗ヲ試ミタリ、元來同氏等ノ研究ニ依レバ「ヴァイタミンB」ハ非耐熱性ニシテ攝氏百二十度以上ニ加熱セバ、本來ノ神經炎治療作用ヲ消失ス、從ツテ既ニ「ヴァイタミンB」ト稱スベカラザルナリ、故ニ前記ノ決定試驗ハ眞ノ「ヴァイタミンB」ト稱スベカラザルナリ、故ニ前記ノ決定試驗ハ眞ノ「ヴァイタミンB」ト稱スベカラザルナリ、故ニ前記ノ決定試驗ハ眞ノ「ヴァイタミンB」ト稱スベカラザルナリ、有セル非加熱(煮沸)液ト加熱液トヲ以テ比較シ前者(液)ノミニ反應陽性ナリセバ「ヴァイタミンB」自身ノ作用ニ歸シ兩液ニ表ハルレバ即チ混在物質ニ因スト決ス可キナリ、前實驗トシテ「バーゼル化學工業會社ヴァイタミン製劑ナル」オリバン液ニ就キ鳩ノ人工的白來病ヲ該液一・cc内外ノ靜脈注射ヲ以テ完全ニ治療スルヲ認メ、又攝氏百二十度以上ニ加熱後ハ全然該作用ノ消失スルヲ立證セリ、炭ニ於テ兔ニツキ前二種ノ材料ヲ各々二・五cc靜脈注射ヲ以テ副交換神經系亢奮状態ヲ比較シ同時ニ一・%硫酸アトロピン液ヲ用ヒテ定量セリ、其ノ結果煮沸「オリバン液」ハ屢々原液ニ比シテ強力ナルヲ認メタリ、又煮沸液ヲ用ヒテ數回動物ノ頓死ヲ惹起セルヲ見、恐ラク煮沸液中心臟毒ノ増加セルモノト思惟シ之ヲストラウブノ裝置並ニ方法ヲ以テ定量測定セリ、即チ原液ハ一・%リンゲル稀釋液〇・五ccヲ以テ煮沸液ハ同様〇・二ccニテ蛙心臓ノ擴張期停止ヲ認メタリ、尙「オリバン液」加熱攝氏百三十度ヨリ百七十五度ニ至ル數等ノ温差ニ於テ前記實驗上特記スベキ差違ヲ認メザリキ、次ニ加熱ノ方法ハ液ヲ密閉セル評量瓶ニ入ル之ヲ「アウトクラーパー」中ニテ目的ノ溫度迄加熱後消燈シ自然冷却ヲ待チテ使用セリ、以上ノ實驗ノ示ス如ク「オリバン液」ハ百二十度以上ノ加熱ニ因リテ本來ノ「ヴァイタミンB」消失後著シク副交換神經亢奮性及心臓麻痺作用ヲ増加セリ、此ノ増加セル作用ハ或ハ本來ノ「ヴァイタミンB」破壊後ノ分解產物ニ因スルニ非ラザルカ?

討 論 須 藤 博 士

胃液中ニ於ケル乳酸證明法ニ就キテ。(胃液中ニ於ケル「ロダン」除去法)